

## 第二回

平成二十六年 度

宇都宮短期大学附属中学校

# 入学試験問題

国語

注 意

- 1 「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は四〇分間です。
- 3 問題数は大きな問題が三問で、問題文は一ページから六ページまであります。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 5 「始め」の合図があったら、すぐに受験番号と氏名を解答用紙に記入してください。
- 6 試験中に質問があれば、手をあげて先生に聞いてください。
- 7 「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおいてください。

(一) 次の、言葉に関するそれぞれの問いに答えなさい。

問い1 次の——線部の漢字の読み方が他とちがうものを、下のア～エから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 「ア 幼子                   イ 幼少                   ウ 幼虫                   エ 幼魚」  
(2) 「ア 貿易                   イ 展望                   ウ 包囲                   エ 防災」  
(3) 「ア 子孫                   イ 損失                   ウ 保存                   エ 農村」

問い2 次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 年賀状をスる。  
(2) 今日にイタル。  
(3) ヒタイにあせをかく。  
(4) オークストラのシキシャに会う。  
(5) 大きなリエキをあげる。

問い3 次の慣用句の□にあてはまる言葉をあとから選んで、漢字に直して書きなさい。

- (1) □で笑う。(相手を見下して笑う)  
(2) □が下がる。(尊敬の念がわく)  
「ハラ                   ミミ                   アタマ                   ハナ」

問い4 次の漢字の部首名をひらがなで答えなさい。

- (1) 徳                   (2) 筋

問い5 次の——線部の主語を、——線部ア～エから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 朝、彼は、だれよりも早く登校した。  
(2) 私たちの父も、市役所で働く公務員だ。

(二)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

宇宙では、地球以外は、真つ暗の死の世界です。深くて吸い込まれそうになる怖さ。冷たく凍るような真つ暗闇。本当になにもない、底のない闇の暗さに対するがために、光に満ち満ちた地球の生命感が浮き立つのかもしれない。その(A)で貴しかも、その間に、薄くて華奢な大気のパールがあるんです。その薄いとこにしか命はない。その(B)な印象を増すのだと思います。【I】  
重なパールで生死がせめぎあっている。その対比が(B)な印象を増すのだと思います。【I】

日本では、生死がどこに存在するかを感じることはほとんどない。ところが宇宙では「感じる」ことができる。そして、死を意識すること、強烈な□を実感できる。

それだけではないのです。地球を見ていると、六十五億の人の生活がなぜか伝わってくるんです。見えるわけではもちろんないのだけれど、自分の足元を通過している大陸、島、森を見ながら、どういう人が暮らしているのかなと考えてしまう。そして、この地球は命の歴史をすべて見守ってきた存在だと確信できる。人間にとどまらず、動物が

走り、植物が呼吸しているのがわかる。命のうず巻きと交渉が聴こえる。光と闇。そして水の天体で強烈にその存在を主張している生命たち。

同じ宇宙からでも、船内からと船外からとでは、圧倒的に見えるものが違いました。【Ⅱ】宇宙船から見える景色は、例えるなら新幹線の中から見ると富士山のようなもの。ひとつの景色でしかないんです。(C)だと感じるし、なつかしい地形を見ると感激もする。でも、手をのばせば届くような現実感はない。

しかし船外に出ると、なによりもまずその存在感に圧倒されてしまう。「目で見る」とことと「触感で感じる」からの違いがある。と同時に、生死のせめぎあいの世界からどうして自分が外れているのかを体が納得していないようなのです。人間は地球でしか暮らせないはずなのに、この地球という星でしか命は存在できないはずなのに、地球の一部である自分がなぜここにいるのか。この絶対的な孤独。ここで地球を見ている自分はなにか？ 自分の身体が存在はなく、視点だけがそこにあるという感覚はなにか？ 絶対的な孤独、地球という奇跡、そしてそれを見つめる自分。

お能が好きなのですが、室町時代の役者でもある世阿弥の「離見の見」という、自分の姿を離れたところから客観的に見るような視点<sup>①</sup>、これがあてはまるような気がしました。舞う自分のことばかりに心をうばわれず、第三者である観客から観たときの視点を忘れないようにという、能楽論書『花鏡』の中の言葉です。ぼくは、空間的なものだけでなく、時間的な流れもふくめたものとしてとらえています。

自分が生まれる何億年も前から命の道すがらそこで絶え間なく営まれている。そこでしか存在しないものを、一時的に時空をこえてなぜか見ている。

これを(D)に感じたのは、九日目の三回目の船外活動の時でした。ステーションの上に飛び出ている太陽電池パネルの一番上に立って作業をしていて、ふと下を見下ろしたときのことです。宇宙ステーションが眼下に見え、地球がそのまた下に見え、スペースシャトルはステーションのかたわらに斜め下にあるような状態です。【Ⅲ】地球の圧倒的な存在感と、その地球という海を悠々とわたっていく船。地球の存在感にも感動しましたが、これだけのものを作って持つてきてしまう人間の英知にも心をゆさぶられました。

なにしろ周りは死の世界なんです。命を受け付けない世界が広がっている。ぼくたちは地球でしか生きられない生物。それなのにシャトルは地球のあの薄いベールからここまでぼくたちを運んできてくれた。【Ⅳ】地球の周りを回り、宇宙で働いている。よく造ったなあ、よく来たなあ。ユイツのおかげで、地球は近かったなあ。連れてきてくれて、どうもありがとう。

本当に優れた、世阿弥のような人はぼくが宇宙で感じたことを地上で感じるのだと思います。砂漠を四十日間さまよって得たことだったり、お釈迦さまが菩提樹の下で悟りをひらいたりすることとも似ているのでしょうか。もしかしたら比叡山延暦寺の千日回峰行のような修行は、同じものに到達するためにやるのでしょうか。

たとえる対象が大きすぎてうずうしいかもしれませんが、ぼくのような凡人には、やっぱりそこに行かないとわからない。行かないと見えないものがある。<sup>⑦</sup>「山頂を谷に持つてくることはできない」というけれど、そこに行くからこそ見えるものというのは絶対に存在します。ぼくは、それを見ました。

(野口聡一「オンリーワン ―ずっと宇宙に行きたかった―」から)

(注1) 華奢Ⅱ繊細。 (注2) 能Ⅱ日本の伝統芸能の一つ。

(注3) ステーションⅡ国際宇宙ステーション。筆者は二〇〇一年、この組み立ての任務のために宇宙へ行った。



問い9 ⑥ 同じものに到達するとありますが、「同じもの」とはどのようなものですか。それを説明した次の文の空らん

にあてはまる言葉を、本文中から二字で書きぬきなさい。

命の道すじの営みを  をこえて見るような境地

問い10 ⑦ 「山頂を谷に持つてくることはできない」とありますが、その意味として最も適当なものを次から選んで、記

号で答えなさい。

ア 体験しないと理解できないことが間違いなくあるのです。

イ 結論にたどりつくまでの努力の中にこそ喜びがあるのです。

ウ 結果が出てからでないと気づけない大事な事柄は、絶対にあるのです。

エ できないことに悩むより行動することによってこそ新たな発見があるのです。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父親の転勤で何度も引越しをしてきた「わたし」は友だちをつくらないと決めている。いつも不機嫌で、無愛想な「わたし」に周囲はいらだっていた。そのような時、笑って話しかけてきたのが「エッチちゃん」だった。

「いいなあ、またどこかに行っちゃうんだよね、いいなあ、いいなあ」

何度も言われた。最初はヘンなことを言う子だと思っていた。あんたなんか友だちと別れる悲しさも知らないくせに、と言つてやりたかった。

① エッチちゃんと初めて会ったとき、ほんとうは、気が合いそうだとすぐに思った。くわしく自己紹介をしたわけではなくても、友だちになれるかどうかは、知り合ったときの第一印象がすごく大きい。荒っぽい同級生の中ではちよつとおとなしそうなエッチちゃんの雰囲気は、わたしにはびつたりだった。

宮澤賢治が好きだと知ったときには、ますますうれしくなった。ウチには『風の又三郎』の本もある。図書室に置いてあるのより高学年向けの本だ。読ませてあげたら喜ぶだろうな、とも思ったのだ。

でも、友だちはつくらないという決意は消えていない。揺らいでもない。

仲良くなつてはいけないと思ったから、エッチちゃんにはことさらそっけなく接した。K町では観られないアニメ番組の話をおとしとして、「そんなのも知らないの?」と冷ややかに笑ったこともあるし、話しかけられても無視をつづけて、最後に「うるさいなあ」とはねつけたこともある。

エッチちゃんは一度も怒らなかつた。みんながわたしのまわりから去つてしまったあとも、「いいなあ、また遠くに行くのつて、いいなあ」とうらやんで、「わたしも行きたいなあ……」とつぶつた。

九月の半ばを過ぎたあの日もそうだった。

一人で帰りがかったのに、エッチちゃんは「一緒に帰ろう」と言つてついてきた。歩きながら、またいつものように転校生のわたしをしきりにうらやんだ。

「じゃあ、転校させてもらえばいいじゃない」

そんなの無理だとわかつていて、「お父さんに頼んでみれば?」と突き放すように言った。

すると、エッチちゃんは  (1) 微笑んで、首を横に振つた。

「ウチはお父さんいないから」

「いない、ついで。」

「わたしが小学校に入る前に死んじゃった」

さすがに気まずくなつてうつむくと、エッチちゃんは逆にわたしを励ますように、「でも、お兄ちゃんが漁に出てるから」と言った。

「……だったら、お兄ちゃんに言えば？」

わたしはほんとうに **(2)** だったのだ。

エッチちゃんは、また寂しそうに笑った。

「お兄ちゃん、まだ十六だから、伯父さんに言わないとだめかなあ」

「十六歳で働けるの？」

「うん、お兄ちゃんは高校に行つてないの。中学を卒業したあと、お父さんの代わりに伯父さんの船に乗ってるの」

「お父さんも漁師さんだったの？」

「そう。海で死んじゃったけど」

時化の日に漁に出て、船が沈んでしまったのだという。お父さんが亡くなったあとは、お母さんとお兄ちゃんとエッチちゃんの家族三人、伯父さんの家に世話になつている。

「船の借金も伯父さんが払ってくれたの」

「……いい伯父さんだね」

小学四年生には、そんなことしか言えない。

エッチちゃんは、うん、と小さくうなずいてから、ぽつりと付け加えた。

「三人ともイソウロウだから、肩身が狭いんだけどね」

遠くに行きたい——というのは、**(4)** そういう事情があつたからかもしれない。

わたしは「ふーん」とひらべつたい声で応え、いかにも面倒くさそうに顎を振つてうなずくだけだった。嫌な子だ、ほんとうに。でも、嫌な子をつづけないと、どうしていいかわからなかった。

「お父さんのお墓、あそこにあるの。いつもあそこから、お兄ちゃんの乗ってる船を、守ってくれてるの」

港を見下ろす墓地を指差したエッチちゃんは、「海が時化したときは、わたしもお父さんと一緒にお祈りするんだよ」とつづけた。

夏休みの台風の日、墓地に立っていた人影は、エッチちゃんだったのかもしれない。ふと思つたけど、それを確かめることはできなかった。気まずくて、悲しくて、これ以上嫌な子をつづけるのがキツくなって、**(6)** 黙って駆けだした。

エッチちゃんは追いかけてこなかった。  
(重松清「サンマの煙」から)

(注1) 宮澤賢治Ⅱ童話作家。『風の又三郎』などの作品がある。

(注2) 時化Ⅱ海が荒れること。

**問い1** **(1)** エッチちゃんと初めて会ったとき、ほんとうは、気が合いそうだとすぐに思った。とありますが、それはどう

してですか。その理由を本文中から探し、解答らんの「」だったから」に続くように十字以内で書きぬきなさい。

